P7-05

当院における麻痺手の練習量増加に向けた取り組み
～ＲｅｏＧｏ－Ｊを用いて～

○四元　恵太（作業療法士）、佐々木　菜摘、中村　優花、御書　正宏

医療法人社団　生和会　周南リハビリテーション病院

［はじめに］当院では上肢運動障害の練習量増加を目的としたロボット（ＲｅｏＧｏ－Ｊ）を導入し，対象者の運動麻痺の練習量を増加させるためＲｅｏＧｏ－Ｊ班を立ち上げた．今回当院での麻痺手の練習量増加に向けた取り組みと現状を報告する．［方法］　主な活動内容はスタッフへ機器の使用方法周知と使用技術の向上，ＲｅｏＧｏ－Ｊを使用する対象者の選定，自主トレーニング（以下自主トレ）へ移行するための運用作成等を行った．２０２０年４月～２０２３年３月までの使用者数を調査し，スタッフへ使用についてのアンケートを実施した．［結果］　２０２０年４月～２０２３年３月までの利用者３８名，自主トレーニングへ移行できた患者は６名であった．アンケートではＲｅｏＧｏ－Ｊの使用経験，使用しやすさ，設定方法，対象者の選定等の項目にポジティブな回答が増えた．［考察と今後の課題］　アンケートからスタッフのＲｅｏＧｏ－Ｊを使用する知識や技術は向上している．適応と判断された対象者は増加傾向だが，自主トレとして実施出来た対象者は少ない．これはＡＤＬ自立に満たない対象者が多い，ＲｅｏＧｏ－Ｊの機器操作や準備に慣れる前にその他のＡＤＬ練習等に移行してしまう対象者が多かった事が挙げられる．今後の課題としてＡＤＬ介助であっても操作できる環境調整や院外に発信することでより多くの対象者が入院してくるような働きかけが必要と考える．